



山田孝雄校閱  
谷崎潤一郎譯

源氏物語

卷三

中央公論社

潤一郎譯源氏物語 卷三

昭和三十四年十二月五月初版  
昭和三十七年二月十五日十一版

著者 谷崎潤一郎

校閱者 山田孝雄

發行者 宮本信太郎

印刷者 高橋武夫

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二ノ一

電話 五九二一—三〇

<sup>(561)</sup> 振替口座東京三四

定價二二〇圓

卷三目次

|    |     |
|----|-----|
| 蓬生 | 一   |
| 關屋 | 二九  |
| 繪合 | 三九  |
| 松風 | 四三  |
| 薄雲 | 八九  |
| 檣  | 二五  |
| 乙女 | 一五一 |
| 玉鬘 | 二〇三 |

初

音

.....二四九

插畫

堂本印象  
山口蓬春  
中村岳陵

蓮

生



蓬よもぎ

生ふ

イ、わくらはにとふ  
人あらば須磨の浦  
にもしほたれつゝ  
わぶとこたへよ  
〔古今集〕  
ロ、紫の上

ハ、末摘花

ニ、末摘花の巻参照

須磨の浦で「藻しほたれつゝ」佗びしく過していらした頃、都でもさまざまに歎いていらつしやる人が多かつたのですが、それでも身の寄り所のある方々は、たゞ戀しいと云ふ一筋ひとすぢの思ひに悩んだゞけなので、二條の上などもお氣樂に、配所の方はうともしげくおん文の遣り取りをなさりながら、官位を失ひ給うたお人の、假初のおん装束なども、世の憂きふしの折々につけて送つてお上げになつたりして、心を慰めていらしたのです。それにひきかへて、なか／＼君の思ひ人とは世にも知られず、お旅立ちになつた時の御様子をも、餘所ながら噂に聞いて想像しつゝ、切ない思ひを胸のうちに包んでゐたと云ふやうな人々も多いのでした。

常陸宮ひたちのみやの姫君へは、父親王ちちのみこがおかれなさいました後は、外にお世話申し上げる人もないお身の上で、ひどく心細さうにしていらつしやいましたのを、思ひがけない行きいが／＼からお通



ひなさるやうになつて、ずつとつゞいてゐましたので、君の御威勢から云へば、ほんに何でもない、ちよつとしたお情なさけをおかけになつたお積りなのでしたが、お待ち受けになるお方かたの、見るかげもない御境涯では、大空の星の光を盥の水に映した心地で、過していらつしやいますうちに、あゝ云ふ騒ぎが起つて來まして、君も浮世のあらゆる事が厭におなりになつたりしたお取込の中で、特に深くもおありにならない人達のことなどは、お忘れなされたやうになつて、遠く田舎へお出かけになりましたから後は、わざ／＼おたよりもしてお上げになりませぬ。當座の間は泣きながらも暮していらつしやいましたものゝ、年月を経るにつれまして、しみ／＼と淋しい御有様になつて行かれます。古い女房たちなどは、「やつぱり御運勢が拙くつていらつしやつたのですね。一時は思ひがけなく神佛かみほとけが出現なさつたやうな風で、人はかう云ふ仕合せな御縁ごえんを引き出すこともあるものかと、珍しく存じ上げてをりましたのに、おしなべての世の習はしとは申しながら、外に頼るお方もいらつしやらないおん有様とは、何と云ふ情なさけないことでせうか」と、呟つぶやいて歎くのでした。貧しいなりに暮してゐた頃は、云ひやうのない淋しさに馴れて過していらつしやいましたのに、なまじ途中で少々ばかり世間並な暮しを覺えたゝめに、後あとが一層堪へ難く感じられて歎くのです。少しは嗜みのある女房たちも自然寄り集つてゐたのですけれども、皆つぎ／＼に彼方かみしも此方に散つて行つてしまひました。中には死ぬ者もあつたりしまして、月日が立つに従つて上下かみしもの人数が減つて行きま

す。もとく荒れてゐました御殿のうちが、ひとしほ狐の棲み家になりまして、不氣味に、森閑と生ひ茂つた木立の奥に梟が啼きますのを、あさゆふ耳にするやうになりますと、これまで人氣がありましたからこそ、さういふものもそれに壓されて姿を隠してゐたのです。が、今は木霊など云ふ怪しい物共が所を得て、次第に形を現はし、いろく佗びしいことばかりが起つて來ますのに、たまく残つて仕へてゐます侍女たちは、「もうたまりませぬ。此の頃受領などの、面白い家造りを好みます者が、此の御殿の木立に目をつけまして、お手放しになりませぬかと、つてを求めて申し込んで參るのがございますが、さう遊ばして、斯様な世にも恐ろしい所でないお住居へお移りなさりませ。こゝではお側に残つてをります者も、とても辛抱がなりかねます」など聞え上げるのですけれども、「まあ、ひどい。世間の思はくもあることですし、私が生きてゐます間は、どうしてそんな昔を忘れた事が出來ませう。こんな恐ろしく荒れ果てましたけれども、親のおん面影がとゞまつてゐるなつかしい住みかだと思へば、どんなに慰められることか」と、泣くばかりで、夢にもそんなことはお考へになりませぬ。御調度の類も、たいそう時代のついた、手馴れた品々で、昔風に、立派に出來てゐますのを、生物識の風流がつた男などが手に入れたがつて、誰某の名人にわざわざ作らせ給うたと聞き出して來ては、案内を乞うて、あゝ貧乏でいらつしやつたらと、侮りながら申し込みますと、例の女房たちは、仕様がな、物を賣り拂つたりすることも、世

間にはよくあることだからと氣休めを云ひながら、目前にさし迫つた暮しの辻褄を合せようとする時もあるのですが、きつくお叱りになりました、「私が使ふやうにとお思ひなさればこそ、拵へてお置きになつたのです。何として輕々しい身分の者などの、家の飾りにさせませうぞ。亡きおん方の御本意に背いては申譯がありません」と仰せられて、さう云ふことはおさせになりませぬ。ついちよつとした事にでも訪ねて来てくれる人もないお身の上で、ただ兄君の禪師ぜんじの君ばかりが、たまに京に出ていらつしやる時にはお立ち寄りになりますけれども、それも珍しく古風なお人で、同じ法師と云ふ中でも、寄るべのない、浮世ばなれのした聖ひじりでいらつしやいまして、ぼう／＼と伸びた草や蓬を刈り取つたらばと云ふ程のことをさへ、思ひついても下さいませぬ。そんな譯なので、淺茅あさぢは庭の面おもても見えないやうに茂り、蓬は軒と高さを争つて伸びてゐます。葎ちぐらが西東にしひがしの御門ごもんを、しつかり閉ぢ固めてくれたところは用心がよいのですけれども、崩れがちな周圍しゅうゐの築地ついでは馬牛などの踏み馴らした通り路になつて、春から夏には、牧童が放ち飼ひをする不埒さです。八月はづきの野分が吹き荒れました年に、廊ろうなども倒れ、雑舎しものやの粗末な板葺であつた建物などは、骨組ばかりが纔かに残りました、今では下司げすも住みませぬ。朝夕のけぶりも絶えて、哀れにみじめなことが多いのでした。盗人ぬすびとなどゝ云ふ向ふ見ずな輩やからも、見つきが淋しいからでせうか、此の御殿ばかりは用のないものとして、通り過して、寄り付きもしませぬので、さう云ふ凄しい野ら藪ですけれども、さすが

に寢殿の内だけは、昔のまゝの飾りつけがしてありますが、つや／＼と拭き掃除などをする人もゐませぬ。塵は積りながらも、確かにそれと頷うなづかれる麗うるはしいお住まいには違ひないので、その中に明かし暮していraftしやいます。

果敢ない古い歌や物語のやうなものを相手にしてこそ、つれ／＼をも紛らはし、かう云ふ住まひの遣る瀬なさも慰められるものなのですが、左様な方面の嗜みにも後おくれていらつしやるのです。たつて好ましいことではありませぬが、自然退屈な時などには、同じ心の者同士で文の遣り取りなどをしましてこそ、若い人は折々の本草きくさの風情につけても、憂をお忘れになる筈ですのに、親御がお育てになつたしきたりをそのまゝに、世間を氣の置けるものと思つておいでなされて、たまにはお便りたよりをなさらねばならない方々へも、さつぱり馴れ／＼しくなさいませぬ。古ぼけた御厨子みづしを開けて、唐守いからもり、貌姑射はこやの刀自はくやひめ、赫奕姫の物語の繪に畫いたのを、とき／＼弄もてあそび物にしていらつしやいます。古い歌でも面白いのを選び出して、題だの讀人よみびとだのを明かにして説いてあるのは見所もありますが、型通りな紙屋紙かみやがみや陸奥紙むつちのくにがみなどのぶく／＼したのに、誰でも知つてゐる古歌を書いたのなどは、ひどく無趣味なものですのに、よく／＼お淋しい折々には、そんなものをひろげていらつしやいます。今の世の流行である讀經どきやうや勤行ごんぎやうなどゝ云ふことは、たいそう氣恥かしくお思ひになつていらしつて、世話をして上げる人もないのですけれども、數珠などを取り寄せ給ふでもありませぬ。さう云つた

イ、只、當時の物語であるが、今傳はらない

ハ、竹取物語のこと  
ニ、京都の北郊にある紙屋川で漉いた紙

＊、檀紙。ニもホも共に儀式ばつた紙で風流氣のないもの

やうに萬事が几帳面でいらつしやるのでした。

侍従とやら云ひました御乳母おんめのとの娘だけは、長年ながねんのあひだ何處へ行かうともせずに仕へてゐましたけれども、掛け持ちで通つてゐました齋院がお亡くなりになつたりしまして、たまらなく心細がつてゐます折柄、此の姫君の母北の方の妹の、零落して、受領の妻になり下つていらつしやるのがありました。娘どもを養育してゐまして、みめよい若い人々を抱へたがつてゐますので、全く知らない所よりは、親の代にも奉公したことがあつたのだからと思つて、とき／＼そちらへ通つてゐます。姫君はさう云ふ人馴れないお方ですから、そんな人達と親しい交際もなさいませぬ。叔母君は「故姉君は私を馬鹿になすつて、御自分のお顔にかゝはるやうに思つておいでゝしたから、姫君のお氣の毒な御事情は分つてゐますが、わざとお見舞にも伺ひませぬ」などゝ、侍従に向つて憎まれ口をきゝながらも、をり／＼は音信いんしんをするのでした。生れつきからさう云ふ平凡な身分の人は、却つてよい人の眞似をしようと心がけて、上品ぶるのも多いのですが、貴い血筋を受けながら、こんなにまで落ちぶれる人はさう云ふ宿世があるのでせうか、少し心に卑しいところのある叔母君なのでした。自分の地位が低いために見下げられてゐましたについては、何とかしてから云ふ成り行きにつけ込んで、あの姫君を内の娘どもの召使にしてやりたいものだ、性質などに時勢おくれのところはあつたが、あれなら安心して世話役を頼める、と考へまして、「とき／＼は此方へお越しになつて

下さいまし。お琴を聞かして戴きたく思つてゐる人もをりますから」と云つて來るのです。侍従も始終さう云つてすゝめるのですけれども、格別意地を張ると云ふのではなくて、たゞ恐ろしい引つ込み思案のお方ですから、それほど親しくなさいませぬのを、先は忌まゝくしがつてゐるのです。

さうするうちに、此の叔母君の主人が太宰大貳あるじになりました。娘どもを皆それゝに縁づけておいて下向しようとするのです。矢張何とかして此の姫君を誘ひ出さうと考へまして、「今度遠國へ参りますにつきましては、心細いおん有様が氣にかゝつてなりませぬ。此の年ごろは御無沙汰をしてをりましたとは申せ、御近所に住んでをりました間は安心でございましたが、これから後はほんたうにどうなさいますやら」などゝ、言葉巧みに持ちかけて來るのですが、一向承知なさいませぬので、「まあ憎らしい、勿體ぶつて。御自分一人で己惚れておいでになつても、あんな蘆原の中に幾年も住んでいらつしやるやうな人を、何で大將殿が大切にお思ひ申されませうぞ」などゝけちをつけるのでした。それから間もなくお上のお許しがありまして君は都にお歸りになり、天が下に歡びの聲が満ち溢れます。何とかして人より先に自分の深い志を見て戴きたいとばかり、競ひ合ふ男や女や、身分の高いのや低いのや、さまざまな人の心を御覽になりました、いろゝと世の中の表裏をお悟りになります。それやこれやのお忙しさで、此の姫君のことなどはさつぱり思ひ出して下さりさうな様子もなく

人、只、よの憂きめ  
みえぬ山路へいら  
んには思ふ人こそ  
ほだしなりけれ  
〔古今集〕

て、月日が過ぎて行くのでした。あゝ、もう望みも空しくなつた、年ごろ君がおいたはしい  
おん有様でいらしつたのを、えらく悲しいことに存じ上げながらも、再び萌え出づる春にお  
遇ひになるやうにと祈りつゞけてゐたのに、下様の者共までが喜び合ふ時勢になつて、君も  
立派な官位におつきになつたりするのを、今は他人事のやうに聞いてゐなければならぬ、都  
を落ちていらしつた折の憂さ辛さは、たゞ自分一人が負ふために起つた事のやうに感ぜられ  
たのに、そのかひもない世であつたと、急にがっかりして、辛く悲しくて、人知れず聲をあ  
げて泣いてばかりおいでになります。大貳の北の方は、それ見たことか、あんな風に獨りぼ  
つちで、みすばらしい御様子をしてをられるものを、相手になさる人があるものか、佛や聖  
も罪の軽い人をこそ導いて下さるのだ、あんなおん有様で、まだ意地を張つて、父宮や母君  
がいらしつた時の流儀を通さうとなさるなんて、その高慢がお可哀さうだと、馬鹿々々しさ  
に呆れながら、「やつぱり御決心なさいませ。『世の憂きめ』に逢ふ時は、『見えぬ山路』を  
尋ねると申します。田舎などはいやな所だと思ひになるかも知れませぬが、決してそんな  
に不體裁なおもてなしは致しませぬ」などゝ、たいそう上手に持ち込みますので、もうすつ  
かり氣を腐らしてゐる女房たちは、「さうなすつて下さらないものかしら。どうせ陸なこと  
はおありになりさうもないのに、何と思し召してあんなに強情をお張りになるのか」と、ぶ  
つぶつ云ひます。

へ、此の姫の赤鼻の  
ことは末摘花の巻  
に委し

、潞標二三七頁參  
照

侍従も、あの大貳の甥か何かに當る男を夫に持ちましたのが、都に残して置きさうもありませんので、思ひもよらぬ旅に出るにつけても、「お残し申して参りますのが、心苦しう存ぜられました」と、おすゝめ申し上げるのですが、今になつても、懸け離れてからこんなに久しくなり給ふお人に、頼みをかけていらつしやるのです。お心のうちに、さうは云つても長い間にいつかは思ひ出して下さる折がないことがあらうか、あれほどこしみぐと、情をこめてお誓ひになつて下すつたものを、我が身の不運からかう云ふ風に忘れられてゐるだけなのだ、風のたよりにでも、こんなみじめな様子であることをお聞き込みになつたら、きつと訪ね出して下さるであらうと、此の年月思ひつゞけていらつしやいますので、御殿の風情も一頃よりはなほ荒れまさつてゐますけれども、御自分一人氣を張つて、ちよつとしたお手道具一つでさへもなくなさず、昔の通りになさりながら、心強く辛抱しておいでになるのです。そして涙にかきくれながら一層物思ひに沈んでいらつしやいますところは、まるで山樵が赤い木の實を顔の眞ん中に喰つ着けて放すまいとしてゐるやうにお見えになります。そのおん横顔などは、大概な者には我慢の出来る御容貌ではありませぬ。が、まあそんなことは餘り委しくは申しますまい、お氣の毒でもありますし、口さがないやうでもありますから、冬になつて行くにつれて、ひとしほ取り付く島もなく、悲しさうに、ぼんやりと過していらつしやいます。君のお邸では故院のおんための御八講を、世間ぢやうの騒ぎになるほどにお



催しになります。殊に僧などは並々の者はお召しにならず、學問もすぐれて修行の功を積んである、貴い人々の限りをお選びになりましたので、あの禪師の君もお呼ばれになりました。お歸りがけに姫君のところへお寄りなされて、「これくの次第で、權大納言殿の御八講に參つたのです。たいそう嚴かに、此の世ながらの淨土とはかう云ふものかと思へるくらゐお立派に、趣向の限りを盡しておありになりました。あのお方は佛菩薩の變化へんげでいらつしやるのでせうな。五濁ごぢよくの末世にどうしてお生れになつたことやら」と云つて、そのまゝお歸りになるのでした。言葉ことば少な、普通と違つた御兄弟でいらつしやいますので、無益な浮世の物語などはお互になさいませぬ。姫君は、それにしてもかうまで不仕合せに泣いてゐる身を、無慈悲に打ち捨てゝ構つても下さらないとは、情つれない佛菩薩もあるものよと、恨めしく思ひになりながら、いかにも見限られたのだと、やうくおあきらめになつていらつしやいますと、突然大貳の北の方が訪ねて來ました。いつもはそれほど仲好くしてもゐませなんだのに、連れ出さうと云ふ下心から、御進物ごしんもつの御装束おんしやうそくなどを取り揃へて、よい車に乗つて、顔つきや身ぶりも得意さうに、さも屈託くつたくのなさうな様子をして、不意に押しかけて來て門を開けさせますと、先づその邊の薄氣味の惡さ、淋しさと云つたらありませぬ。右左みぎひだりの扉とびらも皆がたがたと倒れて來ますので、供の男共が手傳つて、大騒ぎをしてやうく開けます。此の廢すたれた宿にも、必ず人の足跡のついた三つの徑こみちはある筈だが、いつたい何處にあるかしらんと